

候。

茲に諸彦が健康と活動とを希望して擱筆可仕候。

會 合

我同志會は昨秋万山錦繡の時節に於て岡崎、上田、山形、前橋に同志の會合を催し母校より先生方の來臨を請ひ互に既往を談じ未來を語り我會の榮に誓の酒をくみ申候。
今其概況を左に略記仕可候。

一、同志會愛知支部發會式

大正五年十月七日愛知縣岡崎市に開催。會合するもの母校よりは針塚校長、勝木教授及松村助手來會會員としては愛知在住卒業生十九名來賓六名(三龍社)にて午後一時より三時迄三龍社講習所に於て發起人會議幹事選舉會計報告及同志會規則修正協議をなし三時半出發(三龍社)岡崎公園巽庭前に參會者一同紀念撮影をなし午後四時開會宮城氏の開會の辭次で針塚校長。勝木教授の演說三龍社長代理寺田松次郎氏の演說あり。次で會員塚本松村二氏の希望演說あり終つて懇親會。午後九時閉會す。當日來會者氏

名各次の如し。

來賓。田口社長代理 田口孝重君 加藤友次郎君 寺田松次郎君。

平松伊三郎君 岡本耕作君

會員。塚本勝彰君 牧野全次郎君 宮城嘉貞君 川合軍之助君

新宮源八君 後藤富次郎君 小笠原安重君 大箸政平君

蒲池深君 稻石佐一君 小林禮二君 安孫子文彌君

佐藤久太郎君 峯村眞一郎君 鹽見喜六君 杉野壽一君

岡田康三君 神邊勘三郎君 松谷礦之助君

今當日の演説の大意を記せば三龍社長代理寺田氏は「我蠶絲業は今や歐洲戦亂と共に益々重用なる地位を占め來れり斯業の隆盛を致すは實に吾人蠶絲業界に携はる者の責務なり、蠶絲業の隆盛を致すの道は學術經驗の併行一致に有り空理空論何れも不可あり、宜しく實驗を重じ學理を尊び以て斯業永遠の發展を圖るきなり」と吾人後進を誡め次で針塚校長は別記の如く「學識は力に非ず學識を實地に活用する之力あり」と云ふ意味の訓話をあされ次で勝木教授は「余は第一回入學生諸氏を教授し天晴れ一角の士として社會に門出するを見んと期し居たれども中途にして歐洲留學の途に上る事とあり其卒業を見ずして渡歐せり別るゝに當り吾が校八十余名の學生が果して如何なる人物として校門を出するやと云事に思ひ致

り万感交々到りて禁じ得ざるもの有りき。余や歸國するに及んで諸子既に社會の人たり。幸にして本校設立の主旨に悖る事なく各自重する事厚く身を處する嚴正あるを見て些か喜を禁する能はざりき。諸子既に社會の人たり。後進業を校に學ぶもの相次で至る。諸子の一進一退は單に諸子にのみ係はるもの非ず。ひいて後進幾千の進退如何。我蠶絲業の盛衰に關する事大かり。豈自任自重斃而後止の決心無くして可からんや」と熱誠以て吾等後進に對し激勵鞭撻の辭を與へられたり。

針塚校長の演説。

我が上田蠶絲専門學校が明治四十四年に開校致しまして以來六年の日子を關し三回の卒業生を出しましたが其數二百二十名の僅少であります。其僅か卒業生が全國に散在して居ますが殊に當愛知縣には各所に御世話になつて居まして比較的多數集まつて居ります。今日茲に母校同窓生諸君が同窓會愛知支部發會に當り私が此處に出る事が出来たのを嬉しく思ひます。此少數の卒業生が同窓會の支部を設け社會活動の基礎になさんとするに至つたのは同窓生諸君の一致共同による事は勿論あれども又三龍社の非常に御多忙なるにもかゝはらず多大の御便宜を與へ下されたる事も與つて方あるものと信じ衷心喜悅の情に堪へないのであります。何卒今後と雖も充分の御指導によつて皆一人立になる様にし又十分仕事の出来る様にして貰い度いと思ひます。尙此日は私共が來たに就ては計り知られざる好遇を賜りまして御禮の言葉には盡されぬ位であります。此の御禮は他の方面に於て何かりと役に立つ様の事がありました

あらば出来る限り盡力致しまして御禮に代へ度いと思ひます。次に同窓生諸君に一言申し度い然し技術上の話は他日話す機会もあらうと思ふから今日は一言先に社會に出た身として諸君の心得可き事もあらうと思ふから之を御話し致します。

諸君が學校で修められた學問技術は唯單に蠶絲業の一の輪割の事柄を形式的に教へられたに過ぎないのである。形式的の知識は實地に當つて何等役に立つものでない。生きた智識であければ役に立つものでない。三年の歲月は甚だ短い。且つ入學當初は實業に趣味を有する事少き人多く中々思ふ通りの教育は出来兼ねるのであります。勢學校では形式的な學問にありて活用的になり難いのであります。此處に於て諸君は社會に出てから活きた智識を修得する様にしなければ諸君の前途が甚危まれるのみならず國家が蠶絲専門學校を設立した主意に背く事になります。

昔支那の語に「趙括の兵法」と云ふ事がある。括は其父奢の兵法を學んだ父の奢は兵法及實戰に長じ趙に重く用ひられた。括は父の兵法をよく學び何人も之に及ぶものが無かつた故に趙王は括を用ひんと欲した時の重臣藺相如は諫めて曰く彼の學は活きて居らぬからやめよと。嘗て括父と問答す。母側に在りて聞くに括の答甚速にして明確であつたが父一向に感心せる景色なし母怪しみて其故を尋ねた父曰く我子の答誤れるに非ざるも兵は生死の間を往復する大事なり之を答ふるに斯く容易なるは宜しからずと答へた是れ父は良く我子を知つて居たと云はれます。趙王相如が言を容れず括を登用せんとした括の母王

に迫りて我子の登用をやめられん事を乞ふ。嘗て父よりこの話を聞きたる事あり、旁々尙思ひ當る事あり。夫は父の出師に際しては別を惜み首途を祝する宴が數十あつた且つ、刎頸の友百人あり、君より賜はらたる物は悉く部下に與へて一物をも留めあかつた。然るに括の爲めに祝盃を擧ぐるもの一人としてない。括は賜はれる寶あらば倉に納め金圓を賜る時は美田を購つた。あんな事から母は是非用ひて貰はぬ事を願つた。然し括に代る可き將軍がなかつたから彼を用ひた。時に會々晋と戦あり、括は大軍を率いて應戦した。然し美事拾萬の大軍は粉碎せられて晋軍に降つたと云ふ話である。

蠶絲業界に働く諸君は之に類する事は多からうと思ふ。學校でよく知つた事も多分役に立たぬ事が多い。即ち眞の智識ではない。眞の智識は實際の事に當つて臨機應變の處置をなし得なければならぬ。眞の智識は實際の訓練によつて得らるゝものである。故に寺田養蠶部長殿より御話のあつた様に世界に活動する氣概は勿論必要であるが、其仕事は極めて卑近な例をとつて云へば、尿の掃除迄もする位の考で万事の事に當つて今迄修めた形式の智識即ち死んだ智識を活きた智識として働らかせねばならぬ。

柔道をするにしても其型は貳十か參十手に過ぎない。この位は數日にして學び得るのであるが型を覺けた丈では何の役にも立たない。長い間の訓練と練習によつて始めて自分の術として活用する事が出来る。故に多くの術を知らずして唯一の術でもよいから活用し得れば十分價値あるものである。要は活用にある。多くの術を知るとも之を活用する事が出来なければ何の役にも立たぬ。實業界に働くものに於ては

特に此感が深い。故に諸君が勉めて活智識を得ると共に又大ある經驗と活智識を有せらるる人々に對し一日の先輩たりとも十分の敬意を拂ひ之等の人々より十分活智識を學ばねばならぬ。之が爲めに自尊心(己がと云ふ心)があつてはならぬ。我は常に足らざる者であると思ひ此考は日夕且暮些かも諸君の腦裡を去つてはならぬ。

大久保利通公があゝの仕事をあし得たのは修養の賜であつて公の修養の志には實に感ず可きものがある公があれ丈修養せられて居たにかゝはらず晩年死に至る迄毎朝孟子盡心編を必ず讀まれて欠いた事は無かつた。此心掛があつて始めて此仕事が出来るのである。又山岡鐵舟はあの豪氣を持ちながら出一足を殺さなかつたと云ふ事である。筆をとる者でも事務をとる者でも乃至は劔をとる者でも心掛は皆一つである。鐵舟の心掛を忘れてはからぬ。鐵舟は九歳より廿九歳に至る迄武藝を修め劔術に長じ他流と竹刃を合して一步も負けをとりたる事がなかつた。或日淺井又三郎と云ふ者と仕合した。負はしかかつたが大ある岩が前に横はれるものゝ如く如何にしても打入る事が出来あかつた。鐵舟は之れ己の至らざるなりと思ひ後竹刃をとりす竹刃を懐いて寐て考ふる事三年或日ふと思ひ當る事あり即ち竹刃をとりて淺井氏に仕合を申込みたり淺井氏急に破れてしまつた未來鐵舟の劔は其の極に達したと云はれて居る。獨り此美談がある計りでなく鐵舟は未明に起きて突貫の状態をあす事數十度であつたと云ふ。又鐵舟は信仰の念厚く三嶋の寺に至りて十分の祈禱をなすに毎日箱根の難を越したと云ふ。鐵舟の劔は人格の劔

であつた。活きた劔であつた。故に維新の際江戸城陥落せんとするに當り官軍の重圍中を一人悠然として行き大南洲と會して勝海舟の命を報じ遂に萬民を塗炭の苦より救済する事が出來たのである。正に何事によらず達せんとするには斯の如き用意が必要である。諸君は養蠶製絲の學を修め實業に或は官途に携はらんとするに當つては活智識の修得と人格の修養の必要なる事は今迄述べた通りである。人格の修養は斯業界のみならず全國到る處で要求して止まぬ所である。

諺に棒程願つて針程叶ふと云ふ事がある。諸君は大いに發奮してやつて貰はねばならぬ將來大いに發展するか此儘小さく收縮してしまふかは諸君の今の考一つによる。何卒今日の集會を無意味に終らせたくあい。會場たる龍城の龍と云ひ巽閣の巽と云ひ雲を呼んで大いに雄飛せんとする意味を有して居るのではないか。

終りに三龍社の御好意を衷心謝すると共に、御來會下された重役及技術者方々の御厚意の益々深からん事を希ひます。

聊か所感を述べて挨拶の言葉と致し度い。

二、母校に於ける同窓會

大正五年十月十五日第貳回陸上運動會當日來會卒業生を以て同窓會を開く午後五時會則の變更修正を

協議し(別項同窓會規則參照)午後六時母校教授各位の來臨を乞ひて開會す。教友及會員氏名次の如し。

針塚 校長 朝比奈先生 新樂先生 井上先生 三谷先生

和田先生 石倉先生 遠藤先生 原田先生

佐谷戸 健次郎君 小山庸人君 菅澤隆三君 牛山作彌君

佐藤 正己君 依田信一君 加藤徳四郎君 高田茂重郎君

岩住 正明君 伊藤 競君 水野 健吉君 高木 三治君

中山 鑑一君 栗 林 悅君 林 貞三君 佐藤 尙雄君

岡部 彌平君 飯島 正胤君 松村 季美君 小林 義雄君

近藤 正己君 齋藤 格次君 平 澤 勝君 須田 今三君

加美 好男君 中澤 勝也君 坂本 昌造君

松村氏開會に次で校長先生の訓話新樂先生の訓話あり次で牛山飯島二君の所感演説あり次で懇親會に入り歡を盡して九時散會す。校長先生及新樂先生の講演の大要次の如し

校長先生の訓示。

人生は修養を怠る可らず殊に少壯者は寸時も修養の道程を離るべからず。如何に知識技能に達するも精神の修養にして足らざらんか決して大成する事能はざるあり。修養の第一歩は先づ克伐怨欲の四つ

を去るに在り。

克とは人に勝たう勝たうとする事伐とは小功を誇る事。怨とは僅かの事を恨みに思ふ。欲とは私慾なり。實に右四つを去るにあらざれば決して仁の道に達する事能はざるあり。而して更に歩を進めて意、必、固、我を去る可し。意とは我意を張る事。必とは自分にて勝手に定むる事。固とは執着。我とは我慾(我儘勝手)。實に此四つを去るにあらざれば如何に所謂遣り手ありとも決して感服せられず將來大いに爲すあらんとせば須らく以上の邪念を棄てざる可らず以て知識の外に精神的修養を遂げよ青年は須く己を偉大なるものに大成せざる可らず。之をなすもあさざるも唯心の置き所一つなり。大志ある青年は一時人に賞せらるゝとあつるのグリヤたる勿れ而して檜たれ目前の低き位置は決して眼中に置く事なく飽くまで大成の人物たるを期せよ。

新樂先生の訓話。

嘗て諸君が卒業せらるゝに當り校長の御訓示の中に卒業は始業なりと仰せられたり。三年にして業を卒る事は困難なり然し三年學んで毅に志さざるもの少しと先人は云へり。職は大切の事なり然し決して甘んずる勿れ。古語に曰く三人行へば必ず吾師ありと吾人の共に行はざる可らざる事は技術並に精神修養の研究なり。研究して始めて人は人間らしくなるを得るあり。研究して怠らざれば人間は若々しくなりて活動し得らる。以上は要するに自己修養あり。人は自ら教育す可し決して他人にたよる可

らず。元來教育は他動的なるか自動的なるかと云ふに多く他動的と解釋せらるゝこと多し。論語は之を訓めて自動的と云ふ。實際眞理は自分が悟らざれば駄目なり。即ち教育は他動的の如きも自動的あらざる可らざるあり。故に孔子は後生恐る可しと申されたり。他動的なる時は苗にして秀でざるものとある故に諸君は大いに自動的の教育に據り校長の卒業式當日に於ける訓示を体し自ら無限の教育を以て益々研究未來の大成を期せらる可し。

三、東北支部便り

回顧すれば母校の開設は早や六年の昔と相成り其の基礎年と共に固く卒業生を出す已に三回内外各地各方面に活動しつゝあるは同慶の至りと存じ候。

斯界の現状を觀じ今次歐洲大戰の波及を推する時斯業の爲め母校の使命と吾人同窓の責任とは頗る重且つ大あるものあるを覺え候。

此期に際し吾人同窓は大會を催し已往を語り現在を談じ將來を策して各自の團結を固くし母校との連絡を確實にせんとする希望や切なる可く候。

折しも羽陽の秋は地を山形市に相し東北産業の粹を集めたる奥羽聯合共進會を以て飾られ申候。吾人山形縣在住の卒業生敢て發企人の名を冒し曩に東北在住者のみならず廣く書を全國同窓生に飛ばし東北

職業の状態を一覽に供しその所見をも併せ聽かんと御賛同を仰きたるに公私多忙の折柄多數御來會あり盛況を呈し候。

時。大正五年十月廿二日。山形市四山樓を以て會場に充て候。母校よりは針塚校長閣下及朝比奈教授殿特に臨席せられ尙梁川製絲株式會社重役中村佐平次及山形縣農事試驗場在勤齋藤良三郎氏御出席被下候會員としては次の如くに候。

高木三治	安孫子文彌	飯島直	磯野良知
堀江尚	鈴木鍊一	今井又藏	野澤泰治
岡部彌平	久保田秀男	芝荒雄	桶口五十三
稻石榮太郎	志田傳次郎	古山宗八	原田兵衛

以上の外出席の筈なりし人々は次の如くに候

原亮敏氏及甲斐孜氏(兩氏共共進會の審査員にして來形中なりしも時日の關係上出席せず)。

大名昇氏及松野正一氏(共に止むを得ざる要件の爲祝電を以て之に代へ松野氏は翌日來形せられ候)。

本間直人氏及小松厚徳治氏(兩氏は期日前來形公務上出席せず)。

同日午後五時開會

一原田氏開會の辭として各位御參會の勞を謝し此會の開催次第及會に對する希望を述べられ候。

二野澤氏協議問題を呈出し會員に計る所あり。

1. 同窓會員講習會の議

第一案 冬期或は夏期の比較的閑散なる時を撰び母校に於て卒業生の爲め講習會開催の件
第二案 全國各地方に同窓會講習會を開き講師として母校職員に御願する件。

右の内第二案通過し細則草案委員として

原田君、樋口君、藤澤君、大名君、太田君、久保田君の六氏を擧げ後本部と協議する事に決し候。この案に就ては校長閣下も同感の意を表明せられたり。

2. 同窓生連絡の件。

先づ東北在住者は巡回通信の實行をあす事に決し候。

3. 同窓會支部の状況を會報に掲載の件。

奥田達雄氏(三重)の呈出にて至極同感に候。

4. 其の他の件は巡回通信にて議する事。

三、演説

針塚校長。

我國刻下の諸問題より産業界の現状を説かれ穀作農業の利害に及び我國民性及天然の状態より工業の

起る時は織維なる可く就中蠶絲業は有望なるものにしてその需要地なる米國は逐年人口の増殖と一人當り使用量の増加とにより生絲消費率を増大しつゝありと統計によりて示されその他の需要地も擴大され支那及二三蠶絲國の状態を見れば決して日本生絲の生産に過利を來すものにあらずと説かれ次に先生の青年教養の主義とせらるゝ修養に關し古今東西の例證を擧げその必要ある所以を論され常に他動的に流れず與へられたる仕事に對し着實に自動發奮し「大なる生きた人間」を造り上ぐる事に努力す可きを教へ會員一同に深き感動を與へたり。

朝日奈教授。

事を爲す何事も始めありて終りあきに至るを警められ斯かる會の如き皆その弊に陥る事あく益々盛大にすること各自の責任なりと教えられ古人の言の味ふ可きもの多く百聞一見に若かずの例を以て或人の成功を見れば之によりてその人格性行が窺はるゝものなり。常に實行の伴はざる多辯を避け實業家なるものは口の人たるより實行の人たる可しと衣食足りて禮節を知るものなれば居常濫費をなさず相當の時蓄をなして將來成功の因となすべしと吾等に處生の要訣を教えられたり。次に

中村佐平治氏亦實業家として經驗談を話され樋口五十三氏は實業社會に入れば學校に於て想像せる所と反するもの多きもこの間に自己の道を辿りつゝある快を叫ばれ候これにて宴に移り、二三の餘興あり校歌の合唱その他各自歡談裡に午後九時閉會致し候。

最後に原田氏は本部松村幹事より郵送の同窓會に關する協議要項に就て滿場の贊同を得この旨松村氏へ報告する事に致し候。

本會は東北六縣在勤在住者を以て會員とするものにして現在會員左の如くに候(イロハ順)

市川 恕平 東北帝國大學理科大學

稻石榮太郎 山形市外長谷川製絲場

飯島 直 福島縣梁川製絲場

磯野良知 山形縣庄内農學校

今井又藏 山形縣蠶業取締所長井支部

原田兵衛 山形縣原蠶種製造所

原 亮敏 福島蠶業試驗場

本間直人 宮城縣伊具郡立實科高等女學校

嶋鴻暢三 秋田縣北秋田郡花岡村

中川 劉 宮城縣加美郡加美蠶業學校

向山隆福 仙臺北帝國大學理科大學

野澤泰治 山形縣立村山農學校

太田清藏

宮城縣金山町佐野製絲場

大名昇

福島縣原蠶種製造所

久保田秀男

宮城縣立小牛田農林學校

黑江文雄

宮城縣志田郡三本木町

山浦藤藏

仙臺市片倉組製絲場

松野正一

福島蠶業試驗場

藤澤文雄

福島縣郡山町岩代絹絲紡績所

古山宗八

山形縣應勸業課

小松原德治

岩手縣東盤井郡千厩町蠶業學校

佐藤良太郎

宮城縣本吉郡役所

佐藤薰

福島縣郡山町片倉組製絲場

芝荒雄

福島縣蠶業學校

志田傳次郎

山形縣蠶業取締所

樋口五十三

山形縣高島町片倉組兩羽製絲場

仙波秀次郎

山形縣鶴岡町鳥井町

鈴木 鍊一

山形市外小白川長谷川製絲場

(以上は大正五年十月調にて其後移動あれば別欄名簿参照せられたし)

四、群馬支部

大正五年十一月廿六日前橋市に開催せられたる交難種品評會の期を下して前橋市に同窓會を開く。母校より針塚校長臨席せられ來賓としては農務課長青山三次郎氏永井縣技師肥後蠶業試驗場前橋支場長外數氏あり會員中列席者次の如し

牛山 作彌	堀越 彌策	小島 五郎	角田 勝彌
小見 益男	高田 茂十郎	栗原 貫次	岡部 彌平
田中 一男	篠田 平三郎	中山 鑑一	

午後五時開會牛山氏の開會の辭校長の訓話外數氏の所感演説あり。次で本部より送付の本會規則改正協議に移り満場一致を以て原案可決をなし次で懇親會に入り八時閉會す。